

遺品整理業のエスノグラフィー (2)*

——孤独死の現場とリユース事業にみる遺品の類型——

藤 井 亮 佑**

はじめに

本稿は、「遺品整理業のエスノグラフィー (1)」(藤井 2018)に引き続き、兵庫県西宮市の遺品整理業が行う作業事例について、参与観察を通じて記述することを目的とする。

先の「エスノグラフィー (1)」では遺品整理作業の現場における業者と遺族との遺品の処理をめぐるやり取りを事例とともに示した。遺品とは死者の所有物である。遺品整理業はこの遺品の処理について専門的な役割を果たす。遺品整理においては、遺品のあった空間である住居の処理も、そのうちの作業の一つとして遂行することが求められる。しかし、その作業現場の状況は亡くなった人の状況により異なる。そして、それは遺品の状態にも影響する。本稿では、この作業現場の状況にも着目するために、まず孤独死の事例を取り上げる。

一方で、遺品整理業の役割は、遺族への形見分けの手助けをすることや不要とされた遺品の廃棄物としての処理を進めるだけではない。依頼者から売却された遺品を引き取る事も含まれる。それらを遺品整理業は中古品としての再使用(リユース)を行っている。その事例についても業者への

調査をもとに取り上げる。

以降本稿は、まず、孤独死現場での作業から遺品整理業が担う空間や遺品の処理についてみる。そして、一方でリユースされていく遺品の事例を取り上げる。これらの事例から、遺品の諸類型とともに、遺品整理業に求められている役割を描き出していく。

1 孤独死と遺品整理業

孤独死とは誰にも看取られずに亡くなることである。遺品整理業が呼びだされる作業にはこの孤独死についても考える必要がある。遺品整理業という専門業種が生まれる嚆矢となった遺品整理業者の吉田太一(2006)の出版に描かれた主な内容は孤独死現場の清掃および遺品整理の様子についてであった¹⁾。また結城康博(2012)のように孤独死の処理の担い手として主に取り上げられることもある。

孤独死はかつて額田勲(1999)によって取り上げられた時には、阪神淡路大震災時における仮設住宅での発生という出来事としてあった²⁾。しかし、現代で孤独死が問題となる背景には、世帯構造の変化として独居者の増加という要因があげられる。2015年の国勢調査によると、「一般世帯」³⁾

*キーワード：遺品整理業、孤独死、リユース

**関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

- 1) 書籍化のもとになったものは次のブログである。キーパーズ, 2018, 「現実ブログ『遺品が語る真実』」, 遺品整理ブログ, (2018年10月15日取得 http://blog.goo.ne.jp/keepers_real). これは2005年8月4日~2018年8月まで更新が続いている。
- 2) 額田は阪神・淡路大震災によって建設された仮設住宅での孤独死を事例に、孤独死の定義を(1)「一人暮らしの被災者が仮設住宅内で誰にも看取られずに死亡、事後に警察の検視の対象となる異状死体」(額田1999:47)、(2)「低所得で、慢性疾患に罹患していて、完全に社会的に孤立した人間が、劣悪な住居もしくは周辺領域で、病死および、自死に至る時」(Ibid.:137)としている。
- 3) 「一般世帯」とは「施設等の世帯」(学校の寮・寄宿舎の学生・生徒、病院・療養所などの入院者、社会施設の)

の数は5333万1797世帯だが、そのうち「単独世帯」（世帯人員が1人〔独居〕の世帯）は1841万7922世帯（一般世帯の34.6%）となっている（総務省2017:5）。また人口問題研究所（2018:3）によると、「単独世帯」は一般世帯総数が減少に転じる2023年以降も増加し続け、2040年には2015年より約153万世帯多い1,994万世帯となり、一般世帯総数に占める割合も2040年に39.3%へ上昇すると推計されている。このように独居者の増加がみられるが、孤独死の条件にはこの独居という事態が関係する。独居者の住居内の事故や病気による突然死を考慮すれば、誰にもみとられず、気づかれずに死んでいく人は図らずしも現れるからである⁴⁾。周辺の住民にとっては赤の他人の予期せぬ孤独死が隣家で発生しうるのである。このような孤独死は必ずしも老衰など加齢による死に限られるものではなく、高齢者に限った問題としてみることは適切ではない。

一方で、孤独死が問題とされる次の事態がある。それは遺体の腐敗である。孤独死を特殊や異状な死として問題となるのは、現代で想定される死からかけ離れているからである。N. エリアスが「これから死んでゆこうとする人々が、かくも衛生的に健康な人々の目の前から姿を消し、社会生活の舞台裏へと追ひ払われるようなことは、人類史上未だかつてなかったことである。未だかつて、ヒトの死体がかくも無臭のままに、これほどの技術的完璧さをもって臨終の部屋から墓地へと運送された例はない」（Elias 1982=1990:36）と指摘するように、文明化とともに死は科学技術によって衛生的に管理されてきた。しかし、孤独死はその死の事前に準備をする間を与えない。孤独死は誰にも看取られなかった死という、その発見された状況から孤独死と認識されるからである。孤独死においては、遺体の発見にまで時間がかかり、時には腐敗し、悪臭を発する場合がある。遺

族や周囲の人々にとってはそうした状態のなかに置かれた残された遺品や部屋の処理が課題として残される。

またこうした自殺や孤独死の発生した不動産は、商品としては「事故物件」として扱われる側面がある。宮崎裕二らは、不動産取引における、体液の飛散などの物理的瑕疵だけではなく、それら異状死の発生による心理的嫌悪を呼び起こす考慮要素「隠れた瑕疵」（宮崎ほか2014:57）による価値の減少を取り上げた判例をまとめている。このように孤独死は死後の時間経過によっては、住居や部屋といった死亡場所に遺体の腐敗の痕跡が残されることに加え、死が起こったという事実への嫌悪によって問題化する。ここで、この孤独死のあった場所の処理を担う業種として遺品整理業は登場する。それでは次章でその事例についてみていく。

2 遺品整理業「C」の事例——死臭

ここでは兵庫県西宮市の遺品整理業者「C」（以下、「C」）への調査において、立ち会ったある孤独死の事例を提示する⁵⁾。

この作業に参加したのは「C」の社員1名と「C」のフランチャイズの作業員1名の計2名であった。依頼された作業現場に向かう社用車には作業道具として掃除機やちり取り、台車などに加えて、ゴム長靴と消毒液を詰めたスプレーを載せていった（図1）。作業着は通常の業務とは異なり、特殊清掃用のものであった。特殊清掃とは、孤独死に限らず、自傷や他殺によって血痕が飛び散った現場など、遺体や体液の処理が含まれる清掃作業のことである。「C」の用意した特殊清掃用のオレンジ色のつなぎの作業服を着用し、顔には紙マスクを装着した。この作業服は強力な洗剤による洗濯が繰り返され、どれも少し縮んでしま

ㄨ 入所者、自衛隊の営舎内・艦船内の居住者、矯正施設の入所者などから成る世帯）を除くものである（総務省2017）。

4) 孤独死は人間関係の希薄さに着目され取り上げられることもある。「無縁社会」（NHK 2010）という言葉には、まったく身寄りのない人間がただただ消滅するかのような死としての「無縁死」ということも想定されている。この「無縁死」について中森弘樹は「無縁死」の概念の登場が、われわれの関心を社会から認知されない死に向けさせたと説明する（中森 2011:166）。

5) 2016年9月12日に調査。



図 16) 社用車に載せられた作業道具

っていた。

作業現場には依頼者である死者の父が立会いに訪れていた。依頼者は作業自体を見ることはなかったが、それが終わったあとの部屋の様子を確認していた。亡くなったのは 50 代男性、2016 年 7 月からは病気による休職状態であった。依頼者である父によると、子が退院してすぐの 8 月 5 日に住居を訪れたがでてこず、マンションの外に出て部屋の窓をみると子がこちらを見ていたので居留守を使われたようだったという⁷⁾。しかし、それが最後の子との接触となった。警察の調べによると 8 月 7 日が死亡推定日時とされる。9 月 2 日に依頼者の妻が部屋を訪れた際に、本件に至る事態は発覚した。その後「C」への依頼があり、この現場の作業見積もりは 9 月 4 日に行われていた。

現場は兵庫県芦屋市にあるマンションである。芦屋市での作業はエレベーターの入口、壁などに養生マットを設置しておく。建物に傷が付くことによる商品価値の低下には、土地柄として特に敏感だと業者はいう⁸⁾。

1DK の部屋に残された遺品はクローゼットにはスーツが数着、トイレには雑誌、洗面道具、部

屋にはソファ、ベッド、タバコ、小型ブラウン管テレビ、DVD・VHS 等録画再生器、ラジカセ、音楽 CD、カセットテープ、ライターなどがみられた。本作業では、これらの部屋にある遺品はすべて廃棄物として扱われた。孤独死の現場では最初に警察が事件性を調査する時点で、貴重品等は回収されるため、それらを探し出す作業の必要もなかった⁹⁾。すでに部屋には殺虫剤を使った処理が行われていたようであるが、部屋にはネズミの糞がところどころ落ち、ハエも数匹飛んでいた。

かつての住人は玄関と部屋をつなぐ廊下にて亡くなっていたとみられた。気温 35℃ を超える日が続いた 2016 年の 8 月のひと月をともにしたこの部屋の廊下には直径 1.5 メートル程度の炭のような色をした液体が広がっていた。その上には新聞紙がかぶせられており、ところどころ液体は乾きつつあった。作業開始時には、遺品を運び出す際に踏んでも靴が染み濡れないように、さらにその上からダンボールを被せた。この体液と思われる液体から生じる臭いは作業現場の 3 階フロアを占領し、階段を流れ、階下へと広がっていた。このような遺体の腐敗によって生じる臭いのことを「C」の作業員は死臭と呼んだ。この臭いは、残飯や牛乳が腐ったものと同様であり、腐ったタンパク質が放つ酸気に加え、液体を黒く淀ませている血液の鉄分が混じるといったものであった。「C」の作業員の一人は、ゴム手袋を付け、手に持ったヘラを使ってその黒く固まった液体を床からそぎ落とし、消毒液でとり残したものを溶かしていきながらタオルで拭き取っていった。この事例において、「C」の作業員は体液の洗浄作業を「アライ（洗い）」と呼んでいた。体液に触れる特殊清掃作業であるこの「アライ」については 2 万円程度が、作業料金のうちに上乗せされた。作業後は、使用したヘラやタオルはすべて廃棄された。ここで汚れたものはほかの遺品と同様に燃え

6) 2016 年 9 月 12 日筆者撮影。

7) 2016 年 9 月 12 日依頼者への聞き取りから。

8) 2016 年 9 月 12 日作業現場での「C」作業員への聞き取りから。

9) 結城は、殺人や孤独死の疑いのある遺体の発見の過程について、まず、警察が現場に入り、主に事件性の有無の調査とともに遺体が回収され、他殺と判断されれば大学病院などの法医学教室へ送られ殺人捜査へと進み、自殺もしくは自然死であれば、親族へと引き取られるか、もしくは無縁仏として葬られると説明する（結城 2012: 32）。

るゴミの袋に入れられた。しかし、その臭いもれないようにとゴミ袋は二重にし、口はしっかりと閉じられた。

午前8時ごろより始められた本件の作業中は玄関の扉を開け、部屋のエアコンを回しながら行われたため、マンションのフロアには死臭が惜しげもなく流れていった。一方、マンションの下の階のパン屋からは焼きたてのパンの香ばしい匂いが立ち込めており、それらは同じ場所で交じり合っていた。遺品を階下へと運搬する最中にはマンション住民とみられる人々と度々すれ違いながらも淡々と作業は続けられた。

部屋からの遺品の搬出は1時間程度で終了した。「C」が回収する遺品は、テレビや洗濯機などの家電リサイクル法に則った処分が必要となるものだけであり、これらは「C」の社屋に持ち帰って処分の手続きが進められていく。そのほかの遺品は「C」が手配した自治体の回収業者のトラック2台に、粗大ゴミ、燃えないゴミ、燃えるゴミとして回収された。その後、遺品が無くなった部屋には別の特殊清掃業者が消毒のために入った。この業者は全身を白い防護服で包み、厳重なガスマスクを付け、消毒剤を部屋に噴出させていった。

これらの清掃の終わりを依頼者が見届け、作業代金（本件は約20万円）の精算が済むと、その後は依頼者から完了施行報告書と処分品に関する契約書にサインを貰い、「C」はその場を去った。その際、家電リサイクル法で廃棄基準が異なる電化製品である冷蔵庫、テレビを「C」の社用車に載せて会社の倉庫に持ち帰った。死臭はこれらの遺品にしっかりと染みついており、車内にはその匂いが広がっていた。

臭いと廃物化

別の遺品整理業における孤独死の清掃においてもこの死臭は問題となっている。兵庫県宝塚市の遺品整理業者「B」でも同様に孤独死現場の遺品整理および特殊清掃が行われている。「B」代表

N氏は、部屋を管理する不動産業者から依頼があると、死臭と遺品を片付けて部屋を「空っぽにしてほしいといわれる」¹⁰⁾と表現した。「B」、「C」ともに特殊清掃作業においては、高濃縮オゾン発生機で約二週間かけ部屋を乾燥させることで死臭を取り除くことも行っている¹¹⁾。そして、「B」ではその作業終了の際は依頼者に立ち会ってもらい、無臭になったことを確認してもらうという。

これらの事例からは、部屋から遺品を搬出すると同時に、死臭を取り去るという作業を担うのも遺品整理業の業務の一つにみることができる。以上のように死臭をまとった部屋に立ち入り、残された遺品や体液といった死の痕跡に触れ、それらを取り去ることは一つのサービスとして商品化されており、遺品整理業が提供しているのである。ここでは遺族や、住居の周辺住民が主体となって部屋の清掃が行われるのではない。この作業を業者に委託するようになるのは、一つには消臭や消毒のような専門的な科学的技術を業者が有していることがあげられる。澤井敦は、死は医者や葬儀屋などの「専門家」によって管理され処理されるものとなり、社会システムの機能障害を最小限にとどめるために、死をできるだけ合理的かつ迅速に処理し、関与者を「正常」な状態へと速やかに復帰させることが、その基本姿勢となると説明する（澤井2005:141）。孤独死のような事態においては、遺品整理業が携わる部分には住環境の衛生的復帰（これは不動産価値にも関係する）が求められていた。これには消臭や消毒といった薬剤・機材を用いた専門的処理が同じく必要とされるのである。

しかし、別の視点では、このような体液や死臭の染み付いた遺品というものの処理は、遺族や周辺の住民にとっては業者のような外部の人間に任せきりにしても問題のないものである点についても指摘しておく。事例では遺品が誰にも必要とされないものとして廃棄処分とされていた。孤独死の現場にある臭いや汚れといったものは極めて単純に遠ざけられるべきものであった。だか

10) 2016年1月23日「B」代表N氏（仮名）への聞き取りから。

11) 「C」では、オプションサービスとしてオゾン発生機「剛腕1000F」による消毒・消臭作業を料金40,000円から行うとしている（株式会社C, 2016, C配布のパンフレット, [2016年7月14日取得].）。

らこそ残されていた遺品は迷いなしに廃棄処分が容易なものとなっていた。これはいわば取れなくなってしまった死臭が遺品を廃物化していたのである。そして、あえていうなれば、ここでは服喪儀礼の欠如がある。周囲の住民の態度とは、作業中に流れこむ死臭に、ここで起きた事態を察しながらも、何事もなかったかのように通りすぎていた。しかし、この彼らも、遺品が部屋から搬出され、部屋が清掃されていくことの恩恵を受ける。遺族でもない生活環境がただ近かっただけの隣家の人間にとっては、見知らぬ人間のその「『自然』死は、集団がそれに何の役割も演じていないのだから、意味のないものである」(Baudrillard 1976 = 1992: 386)。このような孤独死の処理では、儀式を講じて儀礼的に死の持つ強迫的な恐れを和らげるようなことよりも、一つの汚れ、または悪臭として、洗い流され、消臭されることができれば解決するような世俗的な作業としてみるができる。周辺住民にとっては死臭が消え遺品が片づけられる事によって孤独死によって引き起こされた問題が見えなくなるのである。しかし、事故物件が提起するように孤独死が起きた事実は、その「場」に残りうるのである。

3 遺品整理業が引き取るもの

先の孤独死の事例では、遺品についてはすべて廃棄処分とされる様子がみられた。一方、次の事例からは遺品整理業が作業の対象とするものについて別の処理が行われる様子を追ってみていきたい。これは人が亡くなっていない事例であるが、遺品整理業はそのような仕事の依頼も受けている。彼らの役割を把握するためのもそのような作業事例を載せていく。

この事例での運び出される物品の所有者は老夫婦であった¹²⁾。この老夫婦の娘が今回の作業の依頼者である。作業当日まで娘一人でこの部屋を片付けていた。部屋のもののほとんどはすでに依頼者によって片付けられていた。この事の始まりは、

2015年の4月に依頼者の母が骨折で入院した際に、夫婦二人が暮らす部屋にはものが捨てられずに崩れるほど積み上がり、ゴミ屋敷と化していたことが判明したことにあったという¹³⁾。本件への依頼に繋がることだが、それについては過去に一度、1部屋10万円程度で業者「C」が処分を行っていた。この老夫婦は、その後認知症と診断され親族によって夫婦のみでの生活は不可能であると判断され、このたび、福祉施設へと移ることとなった。その転居により、不要となるものの処分のために「C」は依頼を受けたのである。

作業現場は兵庫県西宮市にある分譲マンションの2階であった。作業員は「C」の2名、午前9時から作業は始まり、老夫婦の娘の夫も、作業の手伝いに来ていた。行われた作業は書棚やタンス



図2 「C」が引き取る家具の一部 (1)¹⁴⁾



図3 「C」が引き取る家具の一部 (2)¹⁵⁾

12) 調査日は2016年9月10日である。

13) 2016年9月10日依頼者への聞き取りから。

14) 2016年9月10日筆者撮影。

15) 2016年9月10日筆者撮影。



図4 業者のトラックに積み込まれた廃棄処分されるもの¹⁶⁾



図5 「C」の倉庫に移動したあとの家具¹⁷⁾

(図2、3)、冷蔵庫、またエアコンほか廃棄処分される家財道具(図4)の部屋からの運び出しが主なものである。今回は10棹ほどもあったタンス類が「C」にリユース品として引き取られた。それらを2トントラックに積み入れる作業を繰り返した後、「C」の倉庫に持ち帰られた(図5)。冷蔵庫と外見の損傷の少ない書棚2つは、依頼者の要望により老夫婦が移居する施設に寄付するため、老夫婦らが入居する福祉施設に運搬し、設置した。全体の作業は13時には終了し、全行程は4時間程度であった。

この事例では、住居の移転をきっかけとし、依頼者から不要とされるものを遺品整理業が引き取る様子がみられた。住居からの退去においては、住人だけではなく、住人の所有物も移動しなくてはならない。ものが存在する限りにはものを置くための入れ物が必要である。つまり、追い出されるものには次の居場所が必要である。そのようにこの事例においては福祉施設に移動する夫婦とともに彼らの所有物も同時に出ていくこととなるが、もちろん入居先に合わせて持ち込めるものの量には制限がある。ここで行く場所を失う家具などの引き取り手として、遺品整理業は登場していた。そして、行き場を失うものの新たな行き場として遺品整理業の倉庫があり、一方には廃棄物処理場があった。

4 「C」のリユース業務¹⁸⁾

先の事例では、遺品整理業が依頼者から引き取ったものがあつた。ここからは、業者「C」が遺品整理にて依頼者から引き取った後の業務の様子を記述していく。

遺品整理などで依頼者から引き取られてきたものは、再使用可能な資源であるリユース品として「C」本社の倉庫に集められていた。「C」の「海外リユース事業部」では、それらが再利用可能なものかどうか検品され、仕分けられる作業が行われた。この倉庫での作業において、回収後のリユース品は「商材」と呼ばれていた。

「C」の倉庫には、インターネット通販業者、中古品リサイクル販売業者、引越し業者、運送業者が持ち込みでリユース品を運んできていた。これら業者から届けられるリユース品は雑貨、衣類などがあり、それらは大まかには分別され持ち寄られているが、倉庫ではさらに細かな仕分作業が行われた。そこではふとん、ポーチ、財布、ぬいぐるみ(図6)、靴、カバン、メガネ、衣服、帽子などとそれぞれ分けられるなかで、特段汚れて

16) 2016年9月10日筆者撮影。

17) 2016年9月10日筆者撮影。

18) 「C」の海外リユース事業部への調査は主に2016年9月15、16日に行った。加えて一部の写真には2016年7月14日、9月6日に「C」へ訪問時に筆者が撮影したものを載せている。

図6 「商材」のぬいぐるみ¹⁹⁾

いるものは廃棄される。家具類も同様である（図8）。リユース品として集められているものは、決して新しく保存状態が良いものばかりではないが、一例として「C」のリユース事業部では「商材」に適さないと判断する「家具廃棄基準」を次のように設けていた。

- ・合版：表面、側面に1センチ以上のキズ、取れない汚れシール等がある場合、廃棄。
- ・無垢：表面2センチ以上、側面5センチ以上、キズ、汚れ、シール、取手の破損や欠損がある場合、廃棄。

その他、アクセサリー、おもちゃ、ギフト商品、タオルや食器、調理器具、CD、ゲーム機類も集められていた。また、リユースされる食器類は、陶器・ガラスのみではあるが、倉庫作業にて一枚ずつ新聞紙で包装され、ダンボール箱に詰め直された（図7）。

これらは、輸出先のタイ、フィリピン、カラチなどの海外の業者に引き取られる。また海外の輸入業者がこちら（輸出業者）に特定の「商材」を要望する場合もあり、これらは「C」では「リクエスト商品」と呼ばれていた。この「リクエスト商品」にはアクセサリーや自転車（図10）が例として挙げられる。それらは輸出時の手続き書類にコンテナに載せられた場所が明示される。「商

図7 仕分けられたカバン類と箱に詰め直された食器類²⁰⁾図8 「商材」の家具類²¹⁾図9 品目ごとに仕分けられた「商材」（左から調理器具、額縁、靴）²²⁾

材」は品目ごとに計量器に乗せられ、写真が撮られた（図9）。輸出用コンテナに何が積み込まれている

19) 2016年9月15日筆者撮影。

20) 2016年7月14日筆者撮影。

21) 2016年7月14日筆者撮影。

22) 2016年9月15日筆者撮影。



図 10 「商材」の自転車²³⁾

るのかを示す書類には、写真併載が必須となっているためであった。書類にはそれぞれの物品の品目と重量が記入されていた。このようなリユース品は、輸出業者との間にて1キロあたり10円程度で売買される。輸出時の手続き書類として、「INVOICE」（送り状）があるが、これには運搬物を示すものとして「VANNING LIST」と「PACKING LIST」があった。「VANNING LIST」とは、コンテナのなかで手前から奥へと詰め込まれた「商材」が形成した一面ごとの層についての説明文書である。これには詰め込まれた各面の「商材」の内容とその写真が必要とされていた（図 11）。また、「PACKING LIST」とはコンテナの内容物についての説明文書である。これは「商材」の品目とその重量を示す書類である。例として「C」の過去のある取引において使用された「PACKING LIST」に記載された「商材」の各品目の詳細は以下のようであった²⁴⁾。

食器（陶器）、食器（ガラス）、ギフト用品、時計、調理器具／台所用品、置物、おもちゃ、ぬいぐるみ、カバン、靴、文房具、掃除用具、帽子、額、人形、キャンプ用品、ゴルフバッグ、ゴルフクラブ、ゴルフカバー、その他スポーツ用品、スーツケース／旅行鞆、健康器具、折りたたみ椅子、オフィス椅子、椅子（木製）、座椅子、椅子（ステンレス）、クーラーボックス、ハンガー／ハンガ

ーラック、傘／折りたたみ傘、杖、パラソル、アイロン台、ラケット、ダイニングセット、テーブル（木製）、スリッパラック、チャイルドシート、ベビーカー、ベビー椅子、ベビーバスタブ、ベビーガード、ベビーサークル、パソコンラック、食器棚、整理ダンス、ワードローブ、和ダンス、ベンチ（木製）、小型家具、サイドテーブル、ソファ、仏壇、靴箱、鏡台、本棚、テレビ台、ごぞ、釣具、風呂用品／洗濯用品、アクセサリ、メガネ、ベビー用品、マット、ネクタイ、財布、ベルト、車用品、ポーチ、鏡、パンスト、スカーフ、雨具、エプロン、日用雑貨、ペット用品、ストール、BBQ セット、レターケース、空気入れ、パーティーション、ゴミ箱、傘立て、クッション、歩行器、エレクトーン、マッサージチェア、提灯、カゴ、布団、プラスチックケース、マットレス、おむつ、工具、服、タオル類、裁縫道具、スピーカー、ピアノ椅子、折りたたみテーブル、テーブル（ガラス）、学習机

この「PACKING LIST」とともに内容物の写真も必要となる。コンテナ一つ分の輸出につき、写真は全部で200～400枚にのぼり、輸出先のバイヤーや税関がこれらを見て審査する。写真には、仕分けされた「商材」がダンボール箱に入れられ計量器に乗っており、表示された重量が確認できるように撮影される。それはたとえば、「靴、12.70キログラム」というように、「商材」の具体的な姿とその重量が表示されたものが写りこむように画角に収められていた。

2016年9月16日分の輸出用コンテナへの詰め込み（予定）は以下のようであった。

- ・リクエスト品としてコンテナ積み込み自転車 300 台
- ・定量（通常の半分量）、タンス 10～11 本、小型家具 20 本、ベビーカート、その他 2～3 カート、椅子 2 カート、ゴルフグッズ

23) 2016 年 9 月 6 日筆者撮影。

24) この「PACKING LIST」は 2016 年 9 月 16 日に「C」の調査にて取得。

1カート、おもちゃ1カート、ソファ4台、テーブル7~8台、食器(200kg)、インターネット通販業者用商材3箱、マットレス2枚、(隙間空いた時)プラケース60~70個、(隙間商材)服飾雑貨1カート、ぬいぐるみ1カート

そして、輸出用コンテナにこれら「商材」を並び詰め、積み込んでいった。本棚、タンス、テレビ台などの家具の引き出しや隙間にはペンや雑貨といった細々とした「商材」は詰められていった。カバン、ぬいぐるみ、ベルトなどがそれぞれ透明なビニール袋に詰められた。業者はこれを「隙間商材」と呼んだ。これら「隙間商材」はコンテナに詰めこまれる家具などを置いたあとの隙間を余すことなく埋めることができる。また、タンスや家具の引き出しや隙間に詰め込む「商材」は「タンス商材」と呼ばれた。それらには雑貨、小さい人形やおもちゃ、文房具、箱に入ったままの食器類などが詰められていった。図8にある布団類は、コンテナへの詰め込みの際、緩衝材としても使われた。

以上のように輸出する物品とその時の契約書類を用意することが「C」リユース事業部の主な作業であった。ここではリユース業務は自社で行った遺品整理作業で回収した家財道具、食器類、家具といったものに限らず、国内のリサイクルショップや引越し業者からも回収・買取したものが倉庫に集められていた。遺品整理の場から引き取ら

れてきた遺品たちも、他のリユース品として集められてきたものと混在している。そして、遺品整理業はそれら集めたものを商品として、輸出していた。遺品整理の作業現場から離れたところでもこのように遺品整理業の業務は続いていた。

むすびにかえて

本稿では、遺品整理業による作業として、まず孤独死の事例にて遺品が廃棄される事について取り上げた。その一方で、依頼者からは不用品とされるも、廃棄物処理場へ送られることを免れ、「商材」というリユース品として再使用されるものがあることを取り上げてきた。これらにある遺品の類型とは、前者は「廃棄物」であり、後者は「商品」である。

これら遺品の扱いはその遺品の状態によって異なる。まず孤独死の事例を取り上げたが、現場の主な作業は、部屋から遺品を搬出し廃棄すること、体液が広がった部分の洗浄であった。ここでは死臭が部屋のなかに満ちていた。孤独死の起こっていた空間に遺された遺品には臭い、すなわち遺体が発する腐敗臭である死臭がついてしまっている為に、何一つリユースされることはなく、廃棄処分とされていた。トラックではなく軽自動車ですの現場に向かったのは、死臭により、リユースできるものとして回収し持ち帰る遺品がほとんどないからであった。この臭いが、遺品が再利用されることや誰かに譲り受けとられる可能性を阻んでいる。孤独死の現場では、取り除けない死臭が遺品を廃物化させる要因となっていた。ここで廃棄物としての遺品は、その残されていた場所あるいは誰かの手元へと引き取られるにふさわしい価値を見出されなかった。しかし、このように価値のないものとして引き取り手を失うものが随時出てしまうことを社会は想定している。そこで建設されているのが廃棄物処分場であり、廃棄物はそこで管理されるものとして移されてくるのである。

一方、この臭いのない場合については、廃棄物として処分される他の選択肢が残されていた。そ



図11 コンテナに詰め込まれた「商材」²⁵⁾

25) 2016年9月16日筆者撮影。

れは商品として改めて市場に出る価値を与えられることである。ここで商品は貨幣としての価値を持つ。「C」の倉庫において、依頼者から不用品とされ引き取られた遺品は、他のリサイクルショップからあつめられてくるような物品と一緒にたにされている。ここでは、どれが遺品だったか分からず、それらは遺品として扱われることもなく、どれもはや遺品としては存在しない。現場から運んできた作業員しかそれが遺品であったことは判然としない。倉庫に送られ、作業員の手から離れる時点で、別の姿への変貌が期待される。ここで「C」におけるリユース品の分類である「PACKING LIST」を思い返されたい。すべてのものは「商材」として品目リストに示された枠組みのもと分類されていった。一度、所有者を失ったかのようにみえた遺品や手放されてきたものたちが、遺品整理業の手に渡るなかで品目の分類とともに名づけられ、商品として蘇り、市場のなかにまた戻っていったのである。

以上の事例で、遺品整理業は誰の手からも手放されてしまった遺品を改めて管理される場所としての廃棄物処分場やリユース品を仕分ける倉庫への運搬に携わっていた。これは、遺品の新たな社会的な居場所として、廃棄物とされれば廃棄物処分場へ、商品とされれば市場という場へと送りだしている。遺品に居場所を与えるこの作業は、一つの遺品整理業の社会的役割としてみるができる。遺品をめぐる社会現象の理論化において、この遺品整理業の役割をより明確にしていくなすべきであるが、この部分については別稿に期したい。

謝辞

調査協力をいただいた遺品整理業「B」、遺品整理業「C」の方々には大変お世話になった。ここに記して、心から感謝の意を表したい。

参考文献

- Baudrillard, Jean, 1976, *L'Échange Symbolique et La Mort*, Paris: Éditions Gallimard. (=1992, 今村仁司・塚原史訳『象徴交換と死』ちくま学芸文庫.)
- Elias, Norbert, 1982, *Über die Einsamkeit der Sterbenden*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1990, 中居実訳『死にゆく者の孤独』法政大学出版局.)
- 藤井亮佑, 2018, 「遺品整理業のエスノグラフィー (1) ——宝塚市と西宮市の事例から」『関西学院大学社会学部紀要』129: 51-61.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2018, 「日本の世帯数の将来推計 (全国推計) 2018 (平成30) 年推計 ——2015 (平成27) 年～2040 (平成52) 年」(2018年11月26日取得 http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2018/hprj2018_gaiyo_20180117.pdf).
- 宮崎裕二・仲嶋保・難波里美・高島博, 2014, 『不動産取引における心理的瑕疵の裁判例と評価——自殺・孤独死等によって、不動産の価値はどれだけ下がるか?』プロGRESS.
- 中森弘樹, 2011, 「『無縁死』概念の社会学的意義——死の社会学におけるその位置づけをめぐる」『社会システム研究』14: 157-68.
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 2010, 『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋.
- 額田勲, 1999, 『孤独死——被災地神戸で考える人間の復興』岩波書店.
- 澤井敦, 2005, 『死と死別の社会学——社会理論からの接近』青弓社.
- 総務省統計局, 2017, 「平成27年国勢調査世帯構造等基本集計結果——結果の概要」(2018年10月15日取得 <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon3/pdf/gaiyou.pdf>).
- 吉田太一, 2006, 『遺品整理屋は見た!』扶桑社.
- 結城康博, 2012, 「葬儀業者・検視医・僧侶・遺品整理業者——予防と事後の取り組み」中沢卓実・結城康博編『孤独死を防ぐ——支援の実際と政策の動向』ミネルヴァ書房, 26-41.

Ethnography of Property Disposal Business (*ihinseirigyō*) (2): Cases of Kodokushi and Reuse of the Effects of the Deceased

ABSTRACT

Following “Ethnography of Property Disposal Business (*ihinseirigyō*) (1),” this paper uses participant observation to describe the property disposal business in Nishinomiya City and outlines their means of disposal of the effects of the deceased (*ihinseiri*). According to participant observations, the conditions of particular work sites depend on the specific situation of the deceased. In this paper, our first study involves a case of cleaning up after a “lonely death” (*kodokushi*). With solitary deaths, it takes time to discover the corpse: sometimes it rots and sometimes it gives off a bad smell. In these situations, their principal job is to remove the odor of the dead. However, the role of property disposal businesses also includes removing and taking control over the articles obtained from the client which often involves reusing them as secondhand goods. Along with such diverse leftover items and work site scenarios, we will explicate the additional roles required of the property disposal businesses.

Key Words: property disposal business, *kodokushi*, reuse of the effects of the deceased